

駒場友の会

会報第26号

味覚のアトリエ@駒場

日本でも本物の食への関心がいいよいよ高まっています。昨年六月には農林水産物に対する「地理的表示法」が施行され、地域で長く育まれた食の名称が知的財産として保護されるようになりました。これまで、あおもりカシス、但馬牛、夕張メロンなどの十品目が登録され、ようやく日本でも本物の食が大切にされる時代になったようです。

駒場友の会の食育ワークショップ「味覚のアトリエ」では、



かねてより、フランスの「原産地統制呼称(AOC)」制度のことを勉強してきましたので、この発展はうれしい限りです。

今年度の「味覚のアトリエ」は、十二月二日(木)に開催されました。会場は駒場ファカルティハウス一階セミナー室。ティファールの協力。定員は六〇名。多くの本学学生に加えて、職員、さらに今回はフランス大使館の参事官二名もお越しくださいました。プログラムは三部構成です。

まず、世界の食文化に詳しい大澤隆さんの講演。続いて「ルヴェンズエール」のオーナーシェフ伊藤文彰さんによる調理の実演。最後は一番楽しみな試食です。

みな試食です。

大澤さんのレクチャーは毎年の定番ですが、今年は特に素晴らしく、食の質を守る生産者の努力がなければ、消費者の信頼を得られず、「安い食」に負けてしまうということ多数の資料を使ってお話になりました。

続いて伊藤シェフの登場です。が、主役は、本家フランスのAOCであり、ヨーロッパの鶏のトップブランド「プレス鶏」です。

この貴重な鶏を伊藤シェフは見事な手つきで皆の前で捌



き、調理を披露されたのです。料理は当地の郷土料理の定番。皆のため息が聞こえるようでした。

さらに、デザートとして登場したのが

市田柿。これは、長野県下伊那郡高森町で大正時代から栽培されている渋柿で、干し柿が有名で市販もされています。これを伊藤シェフは美しいタルトに作り直しました。

ソルボンヌ大学でも同様のプログラムが開催されていると聞いていますが、駒場で四回目となるこのワークショップを支えて下っている皆様に感謝を申し上げます。特に、「味覚の一週間」事務局の瀬古篤子さん、石川栄子さんに御礼を申し上げます。

写真は、上から、プレス鶏を捌く伊藤シェフ、AOCの説明資料(大澤隆さん提供)、フランス直送のプレス鶏、このワークショップの試食の品(左がモリール茸を使ったヴァンジョーヌ風味の鶏、右が色も見事な市田柿のタルト)、下はこの日の集合写真。

ベトナムに大学を作る

古田 元夫

私は、ベトナム研究者で、駒場の教育学科国際関係論の卒業論文でベトナムを取り上げて以来、四〇年以上ベトナムとつきあってきました。私のベトナムとの交流の重要なパートナーが、ベトナム国家大学ハノイ校です(左の写真)。この大学は、フランス植民地時代の一九〇六年に創立されたインドシナ大学に起源をもつ由緒ある大学で、一九九三年にそれまでのハノイ総合大学や外国語師範大学などいくつかの大学が合併して、国家大学になりました。

国家大学の創立間もない頃、ベトナム歴史学会の会長をつとめるファン・ワイ・レ先生の案内で、国家大学の初代総長のグエン・ヴァン・ダオ先生にお会いする機会がありました。この時、ダオ先生から、国家大学の国際的地位向上のためにぜひ協力してほしいというご要望をいただきました。



国家大学と東大教養学部を結びつける機会が、私が考えているよりも早く訪れました。

これは、国家大学に、東大と同じような、一〜二年生の教育に責任をもつ教養学部が設置されたことでした。当時の日本は設置基準の大綱化で国立大学の教養部解体が進んでいた最中で、これに危機感をもっていた東大教養学部のスタッフとして、ベトナムでの教養学部の出現は、支援すべき出来事と思われました。駒場からは、九六年に市村学部長に、九七年には大森学部長と市村前学部長にハノイに行っていたなどしました。しかし、この教養学部は、あまり十分な準備なしに、わずか二〇人の専任教員に、東大とほぼ同規模の学生の教育に責任をもたせるという、かなり「無謀」な設計でスタートしたため、「武運拙く？」九八年には廃止に追い込まれてしまいました。これに懲りずに？はじめた第二段が、東アジア四大学フォーラムという、ベトナム国家大学ハノイ校、北京大学、ソウル大学、東京大学という四大学による大学教育、特に教養教育に関するフォーラムでした。これは、九九年に東大教養学部の行事としてスタートし、翌二〇〇〇年の北京でのフォーラムからは総長も参加する全学行事として開催されるようになりました。東京―北京―ソウル―ハノイが輪番でフォーラムを開催するという形で、二〇一四年まで、四周十六回の会合が開催されました。



日越大学修士プログラムの紹介式典@ハノイ(2015年12月)。ベトナム国家大学ハノイ校は、学内に日越大学管理委員会を設置し、プロジェクト実施体制の構築を進めている。前列左から6人目が筆者

これは、東大、阪大、筑波大、横浜国立大、立命館、早稲田などの日本の大学が協力して、ベトナム国家大学ハノイ校の中に、国際的水準をもった大学をつくるという計画です。二〇一六年秋には、地域研究、公共政策、企業管理、環境技術、ナノテク、社会基盤という、六つの大学院修士課程のプログラムが開講される予定です。ベトナム国家大学と連携することにしたのは、ベトナムで世界水準の大学をつくるには、東大をはじめとする日本の大学との交流実績も豊富なこの大学のハノイ校がパートナーとして最適と考えたからです。国家大学は、ベトナムの教育省ではなく首相府直轄の大学で、総長が大臣級の決裁権を有しているのも、この大学を説得できれば、ベトナム政府の官僚機構を相手に悪戦

苦闘する必要があるというのも理由の一つでした。国家大学は、かつての日本の帝国大学と同じように、傘下に「社会人文科学大学」「自然科学大学」「経済大学」などの「大学」をもっています。日越大学は、こうした国家大学を構成する「大学」の一つとして、ベトナム政府の設置認可を得ました。

日越大学は、その教育に日本からの派遣教員が多く参加している以外は、国家大学傘下の既存の「大学」と同じというわけではありません。日越大学は、日本が協力することによって、従来のベトナムの大学にはなかったものをつくることを目指しています。これまでのベトナムの大学では行われてこなかった先端分野の研究・教育の導入もそうですが、より基本的な大学教育のあり方についても考えています。

ベトナムの高等教育は、ソ連の影響を強く受け、単科大学を主流とする狭い専門分野の教育を重視する傾向を強くもっています。日越大学では、幅広い視野の養成、すなわち教養教育を重視しています。この他にも、研究と教育の融合、自律的な大学財政、産学連携などでもベトナムの大学のあり方に、新しいモデルを提供する大学にしたいと考えています。

この第三段は、いままでの試み以上に挑戦的な内容と規模をもつ事業で、私も、しばらくはハノイに常駐して取り組みることになりそうです。

(東京大学名誉教授、元教養学部長、ベトナム地域研究)

駒場を離れて思う

光島 香織

こんにちは。二年ほど前に教養学部・総合社会科学科を卒業した光島と申します。現在は主に通訳や翻訳の仕事をしております。今回は「卒業生の近況報告」という趣旨での寄稿をお願いされていますので、私が友の会に入会した理由と駒場の魅力、特にしばらく駒場を離れて気づいた魅力について書きたいと思います。

友の会に入会したきっかけは、卒業式で配られたチラシです。会員になれば駒場図書館で本を借りることができるということに魅力を感じ、最初のボーンナスを使って終身会員になりました。会員になったばかりの頃は時折駒場へ行き、他では読むことができない高価な学術書や雑誌を読んでいたのですが、最近は読書に取れる時間が少ないことや本郷の近くに引っ越してしまったこともあり、残念ながらなかなか駒場まで足を延ばす機会がありません。

しかしながら、駒場に帰ってくるといつでもホッとします。図書館前で遊んでいる子供、踊っている学生、大量の資料とパソコンを抱えて歩く人……。いつ訪れてもこの光景は変わりません。駒場は静かで落ち着いていると同時に明るい場所です。これは駒場の魅力の一つだと思っています。

二つ目の駒場の魅力は、いる人の年齢層が幅広いことです。学部二年生前期までは、駒場にはほぼ一、二年生し



筆者近影。駒場コミュニケーション
プラザにて(光島さん提供)

かいないと思っていました。二年の後期になって教養学部内に定すると、駒場の中にも学部三年生以上や院生しかいないような場所があることに気が付きました。院生の中には、かなり長い間駒場にいる人や一度働いてから大学に戻ってきた人がおり、様々な経験談を聞かせてくれます。院生に学部生生活について話すと、興味を持って聞いてくれ、アドバイスをくれたりします。今一年生二年生の皆さんは、ぜひ駒場の中の「年齢層高め」の場所を探してみ、先輩方とおしゃべりしてみてください。きっと新しい発見があります。

忘れてしまいましたが、これらを専門としていらっしゃる方には私には想像もつかないほど深く研究していることへの敬意は忘れることがありません。世の中には様々な専門家がいて、世の中がでけるといふ意味で受けられる授業が多様なのは素晴らしいと思います。

また、友の会の懇親会という場でも、先生方が専門についてわかりやすく語ってくれます。駒場では、普段は考えてみたこともないことについて興味を持つきっかけを得ることができ、素晴らしいです。

四つ目の駒場の魅力は、才能豊かな方が集まっていることです。友の会の懇親会に出席するまでは知らなかったのですが、駒場にはとても優れたピアニスト、歌手がたくさんいます。世間一般では「東大」ガリ勉、「東大」勉強しかできない」というイメージを持たれることが多いのですが、私はそうでないと思っています。懇親会では、才能豊かな方々の素晴らしい演奏を聴くことができ、東大の人が勉強だけをしているわけではないことが改めてわかり、とてもよい時間を過ごすことができました。

このように素敵な駒場キャンパスにいつか戻ってきたいと思っています。

職場の国内大学院留学制度を使って近いうちに、もしくは退職しておおばさんになってからでも、「駒バック」して勉強できればと思います。

(二〇一四年国際関係論コース卒業、
国家公務員、駒場友の会会員)

HCA Pで学んだこと

堀 澄紀

Harvard College in Asia Program (HCA P) とは、ハーバード大学の学生とアジアトップレベルの大学の学生との間で相互への理解や関心を深めていくことを目的として、二〇〇三年にハーバード大学で創設された学生団体です。私たちHCA P東京大学運営委員会は、このHCA Pの東京支部として二〇〇六年に設立され、以来十年間に渡って、ハーバード大学で開催されるプログラム(ハーバードカンファレンス、毎年一月に実施)への参加および、東京におけるプログラム(東京カンファレンス、毎年三月に実施)の企画・実施を行って参りました。

これらのカンファレンスの様子につきましては、弊団体の手嶋毅志(八期)が駒場友の会会報第二三号にてご報告しております。今号では、HCA P東京大学運営委員会の活動について、昨年度(九期)の代表を務めた私の経験からご紹介いたします。

HCA P東京大学運営委員会には、一年生が活動の中心となるという特色があります。毎年春に前年度の委員会メンバーが十数名の新しい一年生を選抜し、その年度のすべての活動は、彼ら彼女らに任せられるのです。

一年生は、一年間をかけて用意する東京カンファレンスを最高の場とするため、チーム作りに始まり、カンファレンスの理念を考えたり、具体的なプ

ログラム内容を企画したり、各方面に協力を仰いだりと多岐にわたる活動に励みます。もちろん大学に入りたての学生がこうした活動すべてを自力で行うことには限界がありますから、在学生中のOB・OGがその活動を最低限サポートしますが、基本的には一年生の自主的・自律的な活動が求められます。

団体が設立された時期に比べて、次第に日本でもハーバード生など海外の学生との交流機会が増えてきていますが、まだまだ東大生がハーバード生と触れ合う機会は貴重だと言えます。

HCA P東京大学運営委員会で活動した一年生が交流を通してハーバード生や同世代のアジアの学生のレベルの高さに焦りや悔しさを覚え、二年生以降自らの興味分野に思い切り挑戦するというのがこの団体での通例です。

にもかかわらず、私はこうしたHCA P東京大学運営委員会の面白さは、この団体がただ単に「国際交流団体」だとは言いきれないところにあると考えています。

第一に、事実として一年間の活動の中で「国際交流」をしている時間が圧倒的に少ないということがあります。活動のほとんどは東京カンファレンスの準備にチームで取り組む時間であり、ハーバード生との交流よりはるかに濃密な「同期との交流」が行われます。一緒に活動し苦労をともにする同期はしばしば顔を合わせる良きライバルであり、かつ全力で一年間向き合い続けたからこそその良き友でもあります。



昨年の東京カンファレンスの期間中に、一般の東大生も招待して行った交流会。東大生とハーバード生が親睦を深め、今後のそれぞれの発展を誓った。(2015年3月20日、東京・渋谷にて)

第二に、そもそもHCAP東京大学運営委員会が国際交流よりも構成員の成長を重視している構造になっているということが挙げられます。国際交流の場としての東京カンファレンスの成功だけを指すのならば、プログラムの内容の大枠は固定し、上級生が中心となって活動を行う構造となっていたでしょう。しかしHCAPでは、逆に一年生はOB・OGに「自分たちで考えて実行しろ」とある意味で突き放され、毎年ゼロから試行錯誤するのです。困惑するほどの自由の下、がむしゃらに最高の東京カンファレンスを実現しようともがく。その過程で、一個人としてのヒューマンスキルを磨き、人と全力で向き合い物事の意味や価値を深く考えるようになる……HCAPはそのような教育プログラムのようになっています。

自分の活動を振り返っても、根を詰めて自分たちのプログラムの理念を語

り合ったり、思うようには回らないチームをよりよくするために他のメンバーに向き合ったりと、普通なら大学一年生には経験し得ないような貴重な体験をたくさん積むことが出来ました。今年も三月の東京カンファレンスが近づいてまいりました。今年の第十期がどうHCAPを定義し、いかなる学びを得るのか、とても楽しみです。

今後、大学の最初の一年で多くの挫折や失敗と少々の成功を味わった学生がHCAPから輩出され、いつの日か巡り巡って自分たちがお世話になった社会に恩返しをするようなサイクルが生み出され続けていくことを心より願っています。

最後になりましたが、HCAP東京大学運営委員会がこのように活動を続けられるのは、駒場友の会から長年に渡りいただいている暖かいご支援とご協賛の賜物です。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

(教養学部二年、HCAP九期代表)

イタリア文化省寄贈図書 コレクション

ビブリオテカ・イタリア

村松 真理子

イタリア語が二〇〇七年から「初修外国語」(いわゆる第二外国語)の一つとして、フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、韓国朝鮮語とならんで履修できることを、ご存知でしょうか。「第三外国語」としての伝統は

ありましたが、「初修外国語」科目に拡充されるにあたり、イタリア外務省が大きな関心をもつて、始動の数年間にわたる人件費補助の寄付金や大使による現代イタリアに関する講演など、継続的に支援をいただきました。その延長上に、イタリア文化省から二五〇冊余の書籍(十映像DVD)コレクション、「ビブリオテカ・イタリア」が寄贈されました。輸送・保険費用を、駒場友の会からご寄付いただきました。

「ビブリオテカ・イタリア」は、世界各国のイタリア文化の教育研究拠点への支援事業です。イタリア語大辞典「バットリリア Battaglia」全二巻(二万頁余り)を中心として、美術・歴史・文学・哲学・デザイン・建築等の叢書や辞典など、聖フランチェスコやダンテから現代までの古典、ネオレアリズム以来のイタリア映画の名作、「カンタウトレー(シンガーソングライター)」の歌と詩(DVDや図書)等を網羅しています。美しい写真や図板豊富な貴重な本が多くあります。

本年は日伊修好条約締結一五〇周年にあたり、さまざまな記念行事が各地で開催中です。ルネサンス芸術から近年のスローフード運動まで、「人間とは何か」を問いつけるイタリア文化の理解が深まる年に、この大きな贈り物が届きました。みなさまもこの春、ぜひとも駒場でイタリア文化との新たな出会いをご体験ください。

(地域文化研究専攻、フランス語イタリア語、駒場友の会事務局長代理)

駒場友の会第十三回総会のお知らせ
五月二日(土) 午後四時四十五分より
会場・駒場コミュニケーションプラザ
北館二階多目的教室
選抜学生コンサートも同日に開催します。どうぞ奮ってご参加ください。
詳細は追ってご案内いたします。

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理 ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさった
コーヒー・紅茶は、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間 11:00 ~ 14:30、17:00 ~ 21:00

Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902

駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報 第26号

2016年3月10日発行

駒場友の会

会長 小林寛道

〒153-8902

目黒区駒場3-8-1 東京大学

駒場ファカルティハウス内

電話 03-3467-3536

FAX 03-3465-3334

メール

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページ

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/

ilovekomaba/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

http://www.sobun-printing.co.jp